すみれ

北條 民雄

昼でも暗いような深い山奥で、音吉じいさんは暮らしておりました。三年ばかり前に、おばあさんが亡くなったので、じいさんはたった独りぼっちでした。じいさんには今年二十になる息子が、一人ありますけれども、遠く離れた町へ働きに出ておりますので、ときどき手紙の便りがあるくらいなもので、顔を見ることもできません。じいさんは本当にわびしいその日その日を送っておりました。

こんな人里離れた山の中ですから、通る人もなく、昼間でもときどきふくろうの声が聞こえたりするほどでした。とりわけ寂しいのは、お日様がとっぷりと西のお山に沈んでしまって、真っ黒い風が木の葉を鳴かせる暗い夜です。じいさんがじっと囲炉裏の横に座っていると、遠くの峠の辺りから、ぞうっと肌が寒くなるような狼の声が聞こえてきたりするのでした。

そんなときじいさんは、静かに、囲炉裏にてのひらをかざしながら、亡くなったおばあさんのことや、遠い町にいる息子のことを考えては、たった一人の自分が、悲しくなるのでした。

おばあさんが生きていた時分は、二人で息子のことを語り合って、お互いに慰め合うこともできましたけれど、今ではそれもできませんでした。

来る日も来る日もなんの楽しみもない寂しい日ばかりで、じいさんはだんだん山の中に住むのが嫌になってきました。

「ああ嫌だ嫌だ。もうこんな独りぼっちの暮らしは嫌になった。」

そう言っては今までなによりも好きであった仕事にも手がつかないのでした。

そして、ある日のこと、じいさんは膝をたたきながら

「そうだ！　そうだ！　わしは町へ行こう。町には電車だって汽車だって、まだ見たこともない自動車だってあるんだ。それから舌のとろけるような、おいしいお菓子だってあるにちがいない。そうだそうだ！　町の息子のところへ行こう。」

じいさんはそう決心しました。

「こんなすてきなことに、わしはどうして、今まで気がつかなかったのだろう。」

そう言いながら、じいさんはさっそく町へ行く支度に取りかかりました。ところが、そのとき庭の片隅で、しょんぼりと咲いている、小さなすみれの花がじいさんの目に映りました。

「おや。」

と言ってすみれのそばへ近寄って見ると、それは、本当に小さくて、寂しそうでしたが、そのかわいい花びらは、澄みきった空のように青くて、宝石のような美しさです。

「ふうむ。わしはこの年になるまで、こんなきれいなすみれは見たことはない。」

と思わず感嘆しました。けれど、それが余り寂しそうなので、

「すみれ、すみれ、おまえはどうしてそんなに寂しそうにしているのかね。」

と尋ねました。

すみれは、黙ってなんにも答えませんでした。

その翌日、じいさんは、いよいよ町へ出発しようと思って、わらじを履いているとき、ふと昨

4【わびしい】ともに過ごしたりする人がいなくて寂しい。静かで、もの寂しい。

8【囲炉裏】床を四角に切って、火をたくようにしたところ。暖房や炊事に使う。

4【膝をたたく】はたと思いあたったり、感心したりしたときの動作。

16【余り】余りにも。

20【わらじ】わらを編んで作った平たい履き物。

日のすみれを思い出しました。
すみれは、やっぱり昨日のように、寂しげに咲いております。じいさんは考えました。
「わしが町へ行ってしまったら、このすみれはどんなに寂しがるだろう。こんな小さな体で、一生懸命に咲いているのに。」
そう思うと、じいさんはどうしても町へ出かけることができませんでした。
そしてその翌日もその次の日も、じいさんはすみれのことを思い出してどうしても出発することができませんでした。
「わしが町へ出てしまったら、すみれは一晩で枯れてしまうにちがいない。」
じいさんはそういうことを考えては、町へ行く日を一日一日延ばしておりました。
そして、毎日すみれのところへ行っては、水をかけてやったり、こやしをやったりしました。
そのたびにすみれは、うれしそうにほほえんで
「ありがとう、ありがとう。」
とじいさんにお礼を言うのでした。
すみれはますます美しく、清く咲き続けました。じいさんも、すみれを見ている間は、町へ行くことも忘れてしまうようになりました。
ある日のこと、じいさんは
「おまえは、そんなに美しいのに、誰も見てくれないこんな山の中に生まれて、さぞ悲しいことだろう。」
と言うと
「いいえ。」

10 【こやし】肥料。

とすみれは答えました。
「おまえは、歩くことも動くこともできなくて、なんにもおもしろいことはないだろう。」
と尋ねると
「いいえ。」
とまた答えるのでした。
「どうしてだろう。」
と、じいさんが不思議そうに首をひねって考えこむと
「私は本当に、毎日、楽しい日ばかりですの。」
「体はこんなに小さいし、歩くことも動くこともできません。けれど体がどんなに小さくても、あの広い広い青空も、そこを流れていく白い雲も、それから毎晩砂金のように光る美しいお星様も、みんな見えます。こんな小さな体で、あんな大きなお空が、どうして見えるのでしょう。私は、もうそのことだけでも、誰よりも幸福なのです。」
「ふうむ。」
とじいさんは、すみれの言葉を聞いて考えこみました。
「それから、誰も見てくれる人がなくても、私は一生懸命に、できる限り美しく咲きたいの。どんな山の中でも、谷間でも、力いっぱいに咲き続けて、それから私枯れたいの。それだけが私の生きている務めです。」
すみれは静かにそう語りました。黙って聞いていた音吉じいさんは
「ああ、なんというおまえはりこうな花なんだろう。そうだ、わしも、町へ行くのはやめにしよう。」

10 【砂金】川底や海底などでとれる、砂のような金の粒。

じいさんは町へ行くのをやめてしまいました。そしてすみれと一緒に、澄みきった空を流れていく綿のような雲を眺めました。

〈出典『北條民雄集』（岩波書店、二〇二二年）〉

【著者】**北條 民雄**（ほうじょう たみお）
一九一四（大正三）年―一九三七（昭和一二）年
作家。徳島県出身。
【著書】「いのちの初夜」「望郷歌」「頃日雑記」など